

# 潤いと彩りあふれる 田園文化都市を目指した町づくり — 東北新幹線全線開業を迎えて —

## はじめに

七戸町は八甲田連峰の東側に位置し、総面積3337・23km<sup>2</sup>のうち山林が約65%を占める自然に囲まれた内陸の町です。

連峰の外輪山・靈峰八幡岳から続く裾野には、広大な家畜改良センター・奥羽牧場が牧歌的雰囲気を漂わせ、高低差の少ない丘陵を利用し畑作・水田地帯が広がっています。

町の基幹産業は、畑作・水田・酪農などを中心とした農畜産業です。この地域は、山背の影響で夏でも日照が不足し冷夏の年も度々ですが、農業者の方々がまぬ努力で出来秋を迎えております。他の地域と比べて決して条件は良くありませんが、清らかな水と澄んだ空気、豊かな大地が安心安全な農畜

産物を提供しています。

町の広域交通網は、国道4号が南北に縦断し、国道394号が4号と交差して東西に延びており、また、みちのく有料道路で県都青森市と結ばれているほか、平成22年12月4日には町のほぼ中央に東北新幹線七戸十和田駅が開業するなど地理的条件から県南地方における交通の要衝として重要な役割を担っています。

今後は一般国道45号の三沢・大間林間や下北半島縦貫道路の早期整備を、全線開業の波及効果を県内等しく受けるための最重要課題とし、関係機関に強く働きかけていかなければなりません。

## 北辺の小城下町

七戸町の歴史は古く、縄文時代の遺跡は町内に数多く存在し、特に二ツ



▲しづのへ秋まつり 嘘嘆太鼓



青森県 七戸町 しづのへまち

▼平成22年12月4日 全線開通する東北新幹線七戸十和田駅。



▲国指定史跡 ニツ森貝塚

森貝塚は平成10年に国史跡に指定されております。平成21年には、二ツ森貝塚や三内丸山遺跡など北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群がユネスコの世界遺産暫定一覧表に記載され、県が中心となり世界文化遺産登録に向けた活動



七戸の名は、鎌倉時代に馬產地として初めて文献に登場します。建久2年(1191年)には、甲斐の南部郷から下向した南部光行の三男・七戸太郎朝清が七戸の地を治め、南部八戸城の支城として七戸城が造られ城下町が形成されています。以来、江戸時代には代官所、明治に入ると郡役所が置かれるなど上北地方の中心として栄えておりました。町場は活気にあふれ近江商人が住み、酒造業や呉服屋、小間物屋が建ち並ぶ小城下町でした。七戸城は昭和16年に国史跡に指定されました。

余談ですが、昭和59・60年から山梨県南部町、身延町、岩手県盛岡市、遠野市、二戸市、そして青森県八戸市、三戸町、南部町、七戸町の9市町が「南北のそにし」のもと南部首長会議を開催し、平成18年には領民68万7千人、面積361、488町（3、5885・02

kmほど東側の上北町（現在の東北町）に新駅ができました。駅舎を持たない七戸町は、十和田市、三沢市など新興都市の台頭と相まって上北地方の中心としての地位を失い、町も次第に衰退していったのです。

このような歴史的背景が、町民の鉄路に対する想いを一層強くし、昭和37年には七戸・野辺地間に南部縦貫鉄道を開通させ、東北本線に接続する鉄道として物資や旅客の輸送を担つていました。しかし、モータリゼーションの進展など自家用車の普及とともに営業は厳しくなり、ついに平成14年廃止されました。

本鉄道が使用していた車両は、バス車体の構造と部品を多用して造られたクラッチャとシフトレバーのあるマニュアル車で、レールバスと呼ばれて

南（）、石高1千万石を保有する「平成南部藩」を結成。毎年子じゅサニシトや参勤交代、一日国替えなどの事業を実施しながら絆を深めております。

## 鉄路への想い

▲新型新幹線「E5系」13年春には東京—青森間を3時間5分で結びます。



いるユニークな可愛らしい車両です。毎年5月には、全国の愛好者で作る「南部縦貫レールバス愛好会」が主催してレールバスイベントを開催しており、全国から多くの鉄道ファンが詰めかけ大変なにぎわいを見せています。

いのこちのへ産直七彩館

▲いのこちのへ産直七彩館



文化村」があり、物産館や当町出身の洋画家を記念して建てられた鷹山宇一記念美術館、農家の朝ざりの新鮮な野菜を販売する農産物直売施設七彩館、七戸秋まつりで出陣した山車の展示と製作を間近に見るひとのできる山車展示館があります。



▲温度と湿度調整だけで長時間熟成発酵させた黒ニンニク。においが少なく、そのままフルーツ感覚で食べられます。

## 観光地への玄関口

東北新幹線七戸・十和田駅の開業は、先達の方々の鉄路に対する熱い想いを無くして語ることはできません。ミニ新幹線導入計画が浮上した時には県内自治体や全町民が一丸となり、フル規格導入に向けて努力してきました。今こうして開業を目前にし、長年フル規格による早期開業のために尽力された方々に対し、地域住民を代表してお礼申し上げなければなりません。

七戸・十和田駅の外壁曲線は、八甲田連峰の山並みと南部馬の優しい背中を表現し、心安らぐ

七戸・十和田駅は地理的に大変恵まれた場所に立地しており、文豪大町桂月がこよなく愛した奥入瀬溪流や十和田湖、本州最北の地・下北半島、山岳

景観と素朴な温泉地が点在する八甲田山へは最も近い駅であることがあり、十

シ「駅から観タク」を始めることになり、またレンタカー会社4社の出店も決定し、二次交通の形が整つてきました。

駅前整備については、新幹線利用客だけでなく一般客も利用する、日常的に「いざわいのある駅」を目指して整備を行つており、平成23年春には駅南側に大型スーパーが進出し、道の駅とともに新幹線駅前は活気に溢れる場所となります。そして、このにぎわいを町の中心商店街や景勝地をめぐる観光コースに誘導することが重要であり、行政や商工会、観光協会など関係機関が一体となり新たな商品開発における試行錯誤しながら進めています。



和田湖、下北半島、八甲田山の玄関口として観光客の利用が期待されます。

しかし、ほかの新幹線駅と比べ鉄路の接続がありません。このため、二次交通の整備にむけて地元の交通関係者と協議を重ねてきました。幸い、十和田観光電鉄とJRバスがほぼ毎日運行し、地元のタクシー業者も観光タク

湖、下北への観光客やビジネス客の交行、地元のタクシー業者も観光タク

和田湖、下北半島、八甲田山の玄関口として観光客の利用が期待されます。しかし、ほかの新幹線駅と比べ鉄路の接続がありません。このため、二次交通の整備にむけて地元の交通関係者と協議を重ねてきました。幸い、十和田観光電鉄とJRバスがほぼ毎日運行し、地元のタクシー業者も観光タク

## 電気自動車で クリーンな地域を

### 終わりに

七戸町は、わずか1万8千人に満たない小さな町です。

平成17年3月、七戸町と天間林村が合併し新生七戸町が誕生しましたが、それでも人口は年々減少し、反して高齢化が加速度的に進んでいます。このような町に先達の方々や周辺自治体、全町民が一つになり完成したのが東北新幹線七戸・十和田駅です。

(平成22年11月29日付第274号)

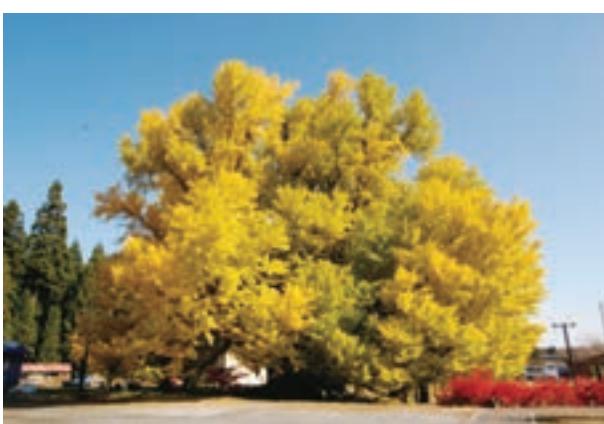
通手段として電気自動車を利用することで自然に優しい駅、環境に配慮した駅の実現を目指しています。本事業を拡大・発展させるためには、電気自動車の性能の向上や充電スタンドの設置など多くの課題がありますが、周辺自治体と連携を密にしクリーンな地域、観光地にするため、試行錯誤しながら取り組んでいます。平成22年度は、電気バスの購入と道の駅に充電ステーションを設置し、平成23年4月から電気バスを町内巡回バスとして常時運行する予定であり、全国でも先駆けた取り組みとなります。

七戸町長 小又勉

広域的に開業効果を享受するため、上十三・下北全域で開業対策に取り組んできました。このような意味からも、各地域が共に手を取り協力していくことが、駅舎の町七戸に与えられた使命と考えております。

新幹線全線開業は「ホールではなく、地と位置付け、周辺自治体ともども発展していかなければ」と願っています。

十和田駅を文化、観光、産業の発信基地と位置付け、周辺自治体ともども発展していかなければ」と願っています。



▶町の木 銀南木(いちょうのき)

# 奥入瀬川の恵みと笑顔あふれるまち

—私たちのまち私たちの手で  
満足度七十% 納得度百%のまちづくり——

## はじめに

おいらせ町は青森県の南東部に位置し、南は八戸市、北は三沢市に接し、それぞれの中心部には車で二十分から三十分の距離にあります。さらに西には十和田市があり、ここへも同程度の距離にあります。このため新幹線八戸駅、あるいは三沢空港にも比較的近く、その他にも東北自動車道やそれに連なる有料道路が南北に走り、その一にも二カ所設置され、第三セクターの青い森鉄道駅も二駅あるなど交通の便には非常に恵まれた地域です。

また、本州北端の県にある本町ですが冬も降雪量は多くなく、年間降雨量も千ミリ程度と暮らしやすい環境にあります。

町の南部には国立公園十和田湖を源とする奥入瀬川が流れ、流域を潤し水田が広がっています。また、北部は台地が広がり畑作が盛んです。

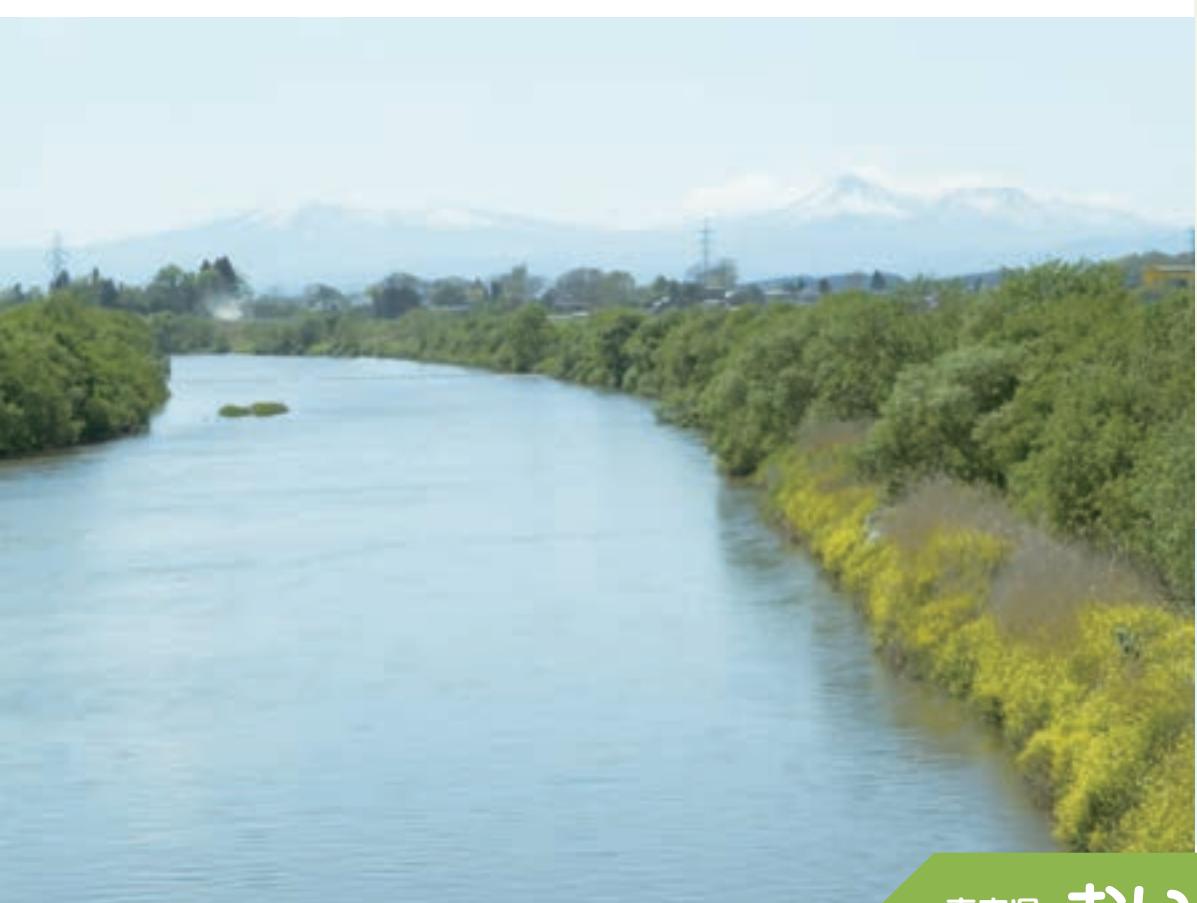
一方、町の東部は太平洋に面して

おり漁業も営まれています。

このほか、工業団地などには誘致企業が三十一社操業しています。

さて、本町は平成十八年三月一日に旧百石町と下田町が合併して誕生しました、まだ六年の若い町です。町名の由来は、町を流れる奥入瀬川からもので、親しみやすさと奥入瀬溪流のある地域と区別するためひらがな表記の町名になりました。

人口は平成二十四年一月一日現在二万五千人余りで、県内では稀な人口が増加している町で、人口規模も町村では一番の町です。要因としましては、前述のように周辺三市に近く、交通インフラが整っている、あるいは自然環境が良いなどからベッドタウン的因素が強いことが挙げられると思います。また、少し古くなりますが、当時では東北最大級といわれたショッピングセンターが平成七年に立地したことその一つと考えられます。



青森県 おいらせ町

▲町内を潤しながら流れる奥入瀬川(遠景は八甲田連峰)

## 満足度七十%、納得度百%のまちづくり



◆達成目標を数値化した町総合計画書

前に記したとおり、本町は平成十八年三月に合併しました。そこで、旧町の成果を引き継ぎ、さらなる発展を目指すべく第一次おこりせ町総合計画を策定しました。目指す将来像を「奥入瀬川の恵みと笑顔あふれるまち」とし、平成三十年を最終計画年次に定めています。

その詳細は省きますが、この計画の特徴的なところの一つは、取組みの対象や目指す姿を明確に示してくる、また達成目標を数値化していくところです。ある施策について、それを実施するのによつて将来はこのように「なつこうる」と結果を想定した表現で示し、例えはココロニティ関係であれば、町内会への加入率や住民自治組織数などを現状と目標値を示すところなのです。これは状況を把握しやすく共通認識しやすいといつ効果があります。

その詳細は省きますが、この計画の特徴的なところの一つは、取組みの対象や目指す姿を明確に示してくる、また達成目標を数値化していくところです。ある施策について、それを実施するのによつて将来はこのように「なつこうる」と結果を想定した表現で示し、例えはココロニティ関係であれば、町内会への加入率や住民自治組織数などを現状と目標値を示すところなのです。これは状況を把握しやすく共通認識しやすいといつ効果があります。

キャッチフレーズに謳つてあります「私たちのまち 私たちの手で 満足度七十%、納得度百%のまちづくり」ということですか。これはまちづくりは住民が主体としていること、情報を共有しながら、対話し、お互いの合意形成を図るところの意志が含まれています。

つまり、今の経済情勢の中、持続可能な町であるためには「それぞれ判断基準が違つ住民の多様なニーズに対し満足度百%を達成することは困難」との考え方で「その行政サービスを提供できない」とすればその理由を説明し合意形成を図ることにより納得してもよいとする考え方です。最初から目標値を下げて取組むのではなく、説明責任を十分果たし、それで納得してもらひえたなり満足度も高まるのではなじかとつことです。現実となるとむずかしい面もありますが、そうした姿勢を大事にしなければと思ひます。

しかし、それではアピール度も弱く、全体的な波及効果が期待できない、もつと総合的な取組みをと、平成十九年度に地域ブランド戦略を取りまとめました。そして「おこりせ」をキーワードに全国発信できる地域ブランドをつくり、それを地域づくりに、産業振興につなげようとする取組みがスタートしたわけです。

本町は合併に伴つて、総合計画とは別にもう一つ町の柱となるものを作りました。それは、町の憲法ともいわれる「自治基本条例」です。

この条例は町民の権利、町民、行政及び議会の役割と責任を明らかにするなど、自治の原則と仕組みに関する基本的な事柄を定めたものです。この

中には毎年度運用状況の検証作業を行ひつつ規定も謳つてあります。ですかひつて条例をつくりました。後々それが「ここに」とではなく、後々その運用状況が問われる仕組みになつていふところことで、条例の理念が担保されるところになります。

## おこりせアソブランド確立への取り組み



◆イベントで特産品などをPR

的には、町のイベント（鮭まつりなど）と農業体験を絡めたミニテーマの企画や地元産品を使った新たな特産品の開発、販売ルートの開拓、認定品制度の創設、あるいは中央のイベントなどに出店して商品のPRをしながら評価を受けねなどなどです。平成二十四年度からは商店街にサロンを出す取組みをしています。

これらの取組みはいま縁についたばかりであり、ましてこの種のものは、一朝一夕に結果が出るものではなく、今後長い取組みをしていかなければと考えております。

具体的な取組みを進めてきています。具

## 太陽光発電設備設置に補助 光回線未整備地区の解消



▲補助制度創設で太陽光パネル設置にはずみが  
(イメージ)



▲ニューヨークの女神像の妹？町の観光名所  
の1つに  
▼つかみどりした鮭を手に笑顔の参加者



平成二十三年三月十一日、本町は東日本大震災に見舞われました。幸いにして死者は出なかつたものの、住宅など建物や農林水産業は大きな被害を受けました。

しかし、皆さまからのお温かいご支援や励ましによりまして、いま復興に向けてがんばっております。紙上をお借りしましてお礼申し上げます。

(平成24年2月20日付第2790号)  
おじらせ町総務課

本町では今年度から一般家庭を対象に太陽光発電設備を設置する場合、経費の一部を助成する制度を創設しました。これは平成二十一年度に策定しました「おじらせ町地域新エネルギー・ビジョン」に重点プロジェクトとして太陽エネルギーの活用を掲げており、それを具体化したものです。

内容としましては、一キロワット当たり四万円、最高額で十六万円を助成するところのもの。当初は二十件分の三百万円を予算措置していましたが、要望が多く、さらに三十件分の増額をしていました。

この他、IC-T関連で若者の定住や利便性の向上のため、光回線の未整備地区の解消に取組んでいます。本町内には電話局の管理区分の都合で、光回線が利用できない地域がありました。

このため、町が総務省の交付金などを活用して回線の整備をし、一RU方式により通信事業者が光ブロードバンドサービスを提供しています。

おじらせ鮭まつりは町の風物詩的イベントで、その日使われる鮭の数が二千匹で日本一ということになりました。これもまたあります。これは、奥入瀬川に遡上していく鮭を特設の生簀に放し、それをつかみ取りまるところがメインのイベントで、この日は米軍の関係者の来場も多く、国際色豊かな雰囲気の中で一日を楽しむことができます。

なあ、「古聞は一見に如かず」です。ぜひ一度お立寄りいただきたいと思います。その際はくれぐれも国立公園奥入瀬渓流のほうではなく、そいかつ流れこぼれる奥入瀬川の東端の町ですのでお間違いのなじよハ」。

ビジョンの中では「エネルギー・環境教育」も重点プロジェクトとしていますほか、「バイオマス」や「BDOE」の取組みなども推進プロジェクトとして位置づけており、今後これらも推進していく予定です。

この他、IC-T関連で若者の定住や利便性の向上のため、光回線の未整備地区の解消に取組んでいます。本町内には電話局の管理区分の都合で、光回線が利用できない地域がありました。このため、町が総務省の交付金などを活用して回線の整備をし、一RU方式により通信事業者が光ブロードバンドサービスを提供しています。

おじらせ鮭まつりは町の風物詩的イベントで、その日使われる鮭の数が二千匹で日本一ということになりました。これもまたあります。これは、奥入瀬川に遡上していく鮭を特設の生簀に放し、それをつかみ取りまるところがメインのイベントで、この日は米軍の関係者の来場も多く、国際色豊かな雰囲気の中で一日を楽しむことができます。

なあ、「古聞は一見に如かず」です。ぜひ一度お立寄りいただきたいと思います。その際はくれぐれも国立公園奥入瀬渓流のほうではなく、そいかつ流れこぼれる奥入瀬川の東端の町ですのでお間違いのなじよハ」。

## 最後に

# 「教育環境、デザインひがしどおり21」の挑戦



▲村制100年を記念して完成した新庁舎

## 東通村の概要 人づくりとしての教育施設の整備

本州最北端青森県下北半島の北東部に位置する東通村は、東は太平洋、北は津軽海峡に面し、面積（294.36 km<sup>2</sup>）の約80%を山林・原野で占めて

いる村です。そして、北東端の尻屋崎を挟み、津軽海峡と太平洋に面した約65 kmにも及ぶ海岸線や、幅約1 km長さ10 km以上にわたる猿ヶ森砂丘など、独自の景観と豊かな自然に恵まれた地域です。

東通村は、明治22年の町村制施行以来、隣接するむつ市に役場庁舎を置く、全国でも極めて珍しい自治体でした。昭和63年に、村の地理的中心地である砂子又地区に役場庁舎を移転し、中心地として整備が始まりましたが、人口は、点在する村内大小29の集落に散在している状況にあります。

また、村議会は、昭和40年に原子力発電所の誘致を決議し、平成17年に東北電力1号機が運転を開始しました。今後、東北電力1基、東京電力2基の建設計画が進行しており、村では原子力発電所との共生による街づくりを進めています。

当村は1万人に満たない人口では



▲仕切りのないオープンスペースでの英語の授業は真剣そのもの



青森県 東通村 ひがしどおりむら

あるものの、村民の総意のもと、他市町村とは合併せず、単独での行政運営を選択して歩んでおります。

このような状況で、村の基本構想の中の重要な柱の一つである「人材育成」を進めるため、①安心して子供を産み育てられる子育て環境づくり、②未来を担う子供たちが将来の夢に向かって大きく羽ばたいていく教育環境づくり等を村の最重要課題に掲げ、取り組んでおります。

教育環境改革への決意

産み育てられる子育て環境づくり、②未来を担う子供たちが将来の夢に向かって大きく羽ばたいていく教育環境づくり等を村の最重要課題に掲げ、取り組んでおります。

環境とは言えない状況となつております。このことは、子供たちの進学状況や各種学力調査において、殆ど全ての教科で満足出来る数値に達していない状況をみて明らかでした。

平成22年、原子力発電所の立地に伴い、各方面の様々な分野の人口流入と地域の高度技術化が進む中で、子供たちが科学技術に関心を持ち、立派な国際人として活躍出来る力を育む教育を施すことは、欠かす事の出来ない必須の条件となっています。

また、将来にわたつて地域の機能を存続させていくためには、地域が自ら様々な分野・職種のエキスパートを育て上げていかなければなりません。それには、子供たちの知力を高め、知力を土台として、徳力・体力が相乗的につき伸張し、心身共に逞しく、自らの夢を達成する力を育成する必要があると感じておりました。

そのため、これまで先人達が築きしきの役割も担い、村独自の形で発展し、愛され、親しまれてもおした。

しかしながら、高度化・多様化する現代社会において、独自の形で発展してきた村の学校は、いつしか子供たちの学力を高める機能を構造的に弱め、多くの子供たちにとつて恵まれた教育

じとを考えていく教育環境を作り出す必要があると決意しました。

## 既成概念からの脱却 「六・三制」に替わる 「一十五・四制」の提案

◆総合教育プラン  
「教育環境デザインひがしどおり21」



平成16年に既成の教育概念や枠組み等、一切の教育界のしがらみに影響されないよう村長部局の企画部門に事務局を設置し、諮問機関の「21世紀東通村教育デザイン検討委員会」に対し、学力の充実を目指した総合教育プラン「教育環境デザインひがしどおり21」の策定を諮問し、翌年3月に答申を受けました。

策定段階においては、教育現場の新たな取り組みや変革を嫌い、低い学力も風土によるものと片付け、現状維持を求める教育現場が様々な形で反発した事から、本検討委員会委員には一切委嘱せず、子供たちの学力向上を切望する保護者並びに村連合PTAから全面的な賛同・協力を得て、多数のヒアリングやワークショップ、アンケートを経て、子供たちの将来を想い、大が大切であり、その過程においては、「保護者・地域・学校・行政」が一体となつて考へ、共に行動・実践する」とが重要であり、村全体で子供たちの

そのため、これまで先人達が築き上げてきた教育的財産と英知、教育への情熱を再認識し、将来を的確に見据えた教育環境を改めて再構築する事が大切であり、その過程においては、「保護者・地域・学校・行政」が一体となり、子供たちの将来を想い、大が大切であり、その過程においては、「保護者・地域・学校・行政」が一体となつて考へ、共に行動・実践する」とが重要であり、村全体で子供たちの

この答申は、骨格デザイン8項目と詳細デザイン30項目で構成されております。主なデザインを紹介すると、①幼小中一貫教育デザイン②幼保一元化デザイン③クラス構成デザイン④学習指導入デザイン⑤生徒寮設置デザイン⑥教諭公募デザイン⑦英語教育デザ



教育を保障する認定こども園を設置すると共に、乳幼児教育カリキュラムを策定し、系統的な乳幼児教育を展開する。③クラス構成デザインは、幼小中ともに少人数学級・教科担任制・習熟度別クラス・ティームマティーチングを行い、より個に応じたきめ細かな対応を行う。④学習塾導入デザインは、村内の学習塾・進学塾が皆無の状態を克服し、首都圏に負けない学校教育以外の教育環境を構築する。⑤生徒寮設置デザインは、中学校4年生を全寮制とし、週5日制のもとで、限られた時間を有効活用し、学力の充実と集団活動を通じた心身の調和のとれた発達と個性の伸張を図る。⑥教諭公募デザインは、使命感に燃え、力量のある優秀な教員を配置するため、村費負担教職員を全国公募により採用し、幹部に積極的に登用していく。⑦英語教育デザインは、乳幼児段階から年齢・発達段階に応じた言語能力や聴覚構成の中の表現能力、記憶能力を考慮したより的確・効果的な英語教育を展開する。⑧住民参画組織構築デザインは、保護者・住民・企業等が積極的に学校運営に関わることにより、より一層の学校参画・学校監視・学校評価・学校協力等を行ない、更に、幼小中の各PTA組織を一元化してNPO法人化し、スケールメリットを活かした積極的な活動を展開する。このような斬新な施策の提言(デザイン)がなされました。

イン⑧住民参画組織構築デザイン等の斬新な提案がなされました。

①幼小中一貫教育デザインは、時間的ゆとりに基づく徹底的な主要教科の履修を行い、基礎・基本を固め、そのうえでよりハイレベルな教育内容を展開し、才能を伸ばすため、小学校就学年齢の1年前倒し（5歳児就学）と学制の括りを既存の「6+3制度」から「6+4制度」に変更し、また、児童館・保育所等の乳幼児施設を1園に統合し、共働き世帯の子供にも幼稚園

児から中学校までを系統的カリキュラムにより指導する幼小中一貫教育を開き、更に、乳幼児施設・小学校・中学校を同一敷地内に一体的に整備し、児童館・保育所等の乳幼児施設を1園に統合し、教職員も横断的に学校間を行き来して学校運営を行う。②幼保一元化デザインは、現在10園ある幼稚園・児童館・保育所等の乳幼児施設を1園

を1校統合、平成21年4月に小学校16校を1校統合しました。

また、平成20年4月に中学校6校を1校統合、平成21年4月に小学校16校を1校統合しました。

答申を平成17年3月に受け、平成17年4月には、本プランを具現化するための人事の刷新を図ると共に、教育委員会内部の機構改革を行い、教育政室を設置するなど実施体制を整えました。



▲構造改革特区伝達式

更に、平成24年4月には、現在（平成22年）10園ある乳幼児施設を認定こども園として1園統合すると共に、乳幼児施設・小学校・中学校を隣接設置し、廊下で繋ぎ、幼小中一貫教育の展開をハード面からサポートしていく予定としております。

一方、ソフト面では、平成17年度に「わが村の先生制度」特区の認定を受け、現在、村費負担教職員を全国公募で15名採用し、小学校で25人学級、中学校で29人学級の少人数学級体制を敷くと共に、小学校段階から主要教科で習熟度別クラス、ティームティーチング

グ、教科担任制を既に導入しています。

更に、平成19年の「東通村英語教育特区」の認定により、小学校1年生から英語科を正規教科として設置し、日本人英語教員、外国人英語教員、学級担任の3人体制で英語教育を行っており、特に、豊かな国際感覚の育成と英語によるコミュニケーション能力が身に付けられる村独自で策定した英語教育プログラムは、小学校段階で中学校卒業程度レベルの習熟を無理なく可能としております。

教育プログラムは、小学校段階で中学能としております。

### 全国初！公営学習塾 「東通村学習塾」の設置



当時、全国初の試みであった公営学習塾「東通村学習塾」の設置は、村内外からとても多くの反響がありました。

民間学習塾が村・保護者と協働で運営を行い、低廉な受講料（月1、000円程度）を導入して、現在、中学生を対象に週2回間、長期休業時はほぼ毎日開設し、村の子供たちの学力強化に貢献している状況にあります。

また、学習塾の運営をより効果的にするために、個別受験相談窓口の設置や、学習塾保護者の会を設立するなど、試行錯誤を繰り返しながら運営を行つて

行つて居る状況にあります。

今後は、受講対象を小学校1年生まで拡充し、全ての子供たちが学習塾に通う体制を整えるとともに、学習塾が年間を通して毎日開催されるなど、先進的な学校教育以外の教育環境を目指し、更なる充実をしていかなければならぬこと考えております。

教育改革は、一朝一夕で成果が見えるものではないため、子供たちの将来に想いをはせながら、着実に根気よく取り組んでいく姿勢と保護者・住民・地域・企業の気運を高めながら協働を保ち、今後、総合教育プランの実現に向け、更なる努力を傾注していきたい

学校教育に対するニーズの多様化と社会や価値観の複雑化の中で、学校教育の本質的研究や全体的な掌握は極めて困難になっています。しかし、政府も学校教育制度そのもののあり方を検討するなど、教育改革という大きなうねりは着実に進行している

状況にあり、本プランを実現して、村の次代を担う子供たちが夢と希望を持ち、自信を持つて、国内はもとより国際社会にも大きく羽ばたいてもらいつゝところが、村にとっての最重要課題だと考えて

東通村長 越善靖夫

（平成22年4月19日付第2717号）



# 「地域の食文化祭」で 地域の食文化を掘り起こす

## はじめに

加美町が誕生したのは、今から7年前の平成15年4月。旧中新田町、旧小野田町、旧宮崎町の3つの町が一つになり、県内ではトップを切っての合併でした。



▲町内荒沢地区にはミズバショウの群生地がある

加美町は、宮城県の北西部にあり東西約32km、南北に約28km、面積は約461km<sup>2</sup>と、県内でも有数の面積を有しています。町の西部や北部が山岳、丘陵地となつており、ブナなど豊かな

原生林が残る東北白名山・船形山（標高1,500m）や、加美富士で親しまれ加美町のシンボルである薬菜山（標高553m）が聳えています。丘陵地から一級河川・鳴瀬川、田川が町を貫流し、その流域は肥沃な田園地帯が広がりをみせ、四季折々の自然の変化が満喫できます。希少な動植物が生息し、ミズバショウの群生地である荒沢地区、天然記念物「鉄魚」（てつぎよ）の生息する魚取沼（ゆとりぬま）は宮城県の自然環境保全地域に指定されています。

古い町並みが残る旧中新田町は、秋田へ通じる羽後街道と山形県尾花沢へ抜ける中羽前街道が交差する交通の要衝として古くから栄えた歴史のある町であり、また、旧小野田町は薬菜山を背景に温泉保養施設を抱える県下でも有数の一大リゾート地として、年間100万人ほどの観光



▲食の文化祭の様子。地域の食卓から1300もの家庭料理が集まった。



宮城県 加美町 かみまち

客が訪れています。

雄大な自然環境に恵まれ山紫水明の加美町では、古くから農業が盛んであり、なかでも「農」に焦点を当て、地域の食を掘り起こすイベントである食の文化祭が田宮崎町で行われてきました。そして現在も「加美町食の文化祭」として、スローフードの取り組みを全国へ発信しております。

地域の商店街は農業とともに発展してきました。しかしながら、ライフスタイルの変化や近隣市町への大型店の進出等で、平成4年には消費流出割合が7割を超え、地元で買い物する人は3割と落ち込んでいました。

消費の流出をくじ止めるために打つ手はなじか、危機感を持った田宮崎町商工会は平成8年に村おこし事業を立ち上げ、翌平成9年から10年度にかけて地域資源のとりえ直しによる新たな地域特産品の開発に取り組み始めたのです。

田宮崎町は農業が基幹産業であり、

## 「コンビニがなくとも 「食」がある



田宮崎町は仙台から北西50キロのところに位置する、人口約1万5千人の町です。田宮崎町は農業が基幹産業であり、また、田川の流域には肥沃な田園地帯が広がっています。この地域は、古くから農業が盛んでおり、その豊かな自然環境が多くの人々に愛されています。しかし、近年では、都市化の進展により、農業生産面で課題が浮上しています。そこで、田宮崎町では、地域資源の有効活用と地域活性化のための取り組みが進められています。



これまでの経過を紹介しますと、平成12年に開催された「第1回食の文化祭」では、1,500世帯から、

▲川魚も町の食文化のひとつ

町全体が食卓に並ぶ。この、当たり前の食事の中に、「田宮崎町らしい豊かな食文化が確立のではないか」との後押しを受け、性急な商品開発を図るのではなく、その前にみんなが田宮崎町の豊かな食を確

め、地域資源を最大限に活用する取り組みが実現されました。この結果、田宮崎町は「コンビニがなくとも、『食』がある」として、多くの人に認知されるようになりました。また、この取り組みは、地域の活性化につながり、多くの人が田宮崎町を訪れるきっかけとなりました。

## 町全体が食卓に

これまでの経過を紹介しますと、平成12年に開催された「第1回食の文化祭」では、1,500世帯から、

850品の家庭料理が集まりました。しかし、最初から850品集まつた訳ではありません。まことに内28行政区、婦人会など各集落を回り説明会をしましたが、「ほつたなふだんのものを人様の前で出すのは恥ずかしくてやんだ」と言つた抵抗や遠慮があり、



▶「おらほの女子衆もたいしたもんだ」と称賛の声を集めた  
地域の女性たち

開催日2週間前までの申し込み件数は、50品程度でした。そこで、実行委員約50名が手分けして町内を一軒一軒お願ひして回ったのです。祭り当日、持ってきた料理がずつと並ぶと「おらほの町には何にもねえ」と自分の町をのじっていた人々も「おらほの女子衆もたつしたもんだ」「おらほの町もたつしたもんだ」と称賛の声が上がり、少しづつ意識の変化が見られました。

翌年の「第2回食の文化祭」でも同じようなことが起こりました。開催日5日前になつても集まつた料理の品数は200品程度でしたが、開催日当日には、1、300品もの料理が集まり、会場となつた体育館は圧巻ともいえる迫力で家庭料理が並びました。

なぜ、直前にならないと集まらないのか、といふ謎はすぐに解けました。それは、スーパー等の大



◀郷土色豊かな料理の数々と興味津々の参加者

のではなく、自家の畑から取れた食材を使って、一番美味しい食べ頃を判断し、見た目も味も最高の状態で出品する料理を作つてしまひました。「第3回食文化祭」ではさうにバージョンアップし、ただ見るだけではなく、味わつてこそ食文化、宮崎町の味を食べてみたいという期待に応え、展示とは別に11,000食の試食コーナーを用意しました。

平成14年から食の文化祭は「食の博物館」として生まれ変わりました。料理の展示会場の他、宮崎町の自然、



春の行事食「植え上げ膳」

文化、そして食の生産過程をまるごと味わえる企画とし、交流の常態化を図るイベントへと発展しました。町内28行政区にある農家の庭先や畠を会場に春編・夏編・秋編・冬編と年4回実施し、宮崎町の食と農のガイド役である「食の学芸員」も50名誕生しました。まず春編では、山菜取り、川魚の炭火焼き、しじたけの菌打ち、春の行事食である「植え上げ膳」を茅葺き民家で食べるなどの企画をし、夏編では野菜のもぎ取り体験、秋野菜の種まき体験、秋編では新米・秋野菜の収穫を中心とした企画を実施し、新米や秋野菜を使った料理の試食を通して、他の地域の人々との交流を深めました。冬編では温泉等交流施設・陶芸の里ゆづりん

どにおいて、「この冬、宮崎町のとりおわし料理でのんびり雪見酒」と題し、この年の「地域に根ざした食生活推進コンクール2002」において農林水産大臣賞受賞記念として開催した交流会や、冬期間の保存の知恵や技を中心とした保存食の展示や試食を実施したところ、大変好評でした。

合併して加美町が誕生した平成15年、

食の博物館は「第8回宮崎食の博物館」として開催されました。この年は地元の小学生も積極的に参加するようになり、自分たちで育てたハーブや手づくりシユウマイの出品む。このように地域の食を見直し、掘り起しそして、その土地のままの食文化を育て、地域活性化の中核に据えてる取組みは年を追つじと、回を重ねるじとに住民一丸の意識や地域の一大イベントへ



### 加美町食の文化祭として

さし、食の文化祭の中心的な役割を担つてついた宮崎町商工会も、平成15年8月に加美商工会へと広域合併したことにより、事務の引き継ぎが困難となる中で、食の文化祭を続けてほしい、との声が上がり、結果的には町の商工観光課が担当するじとに。以降、食の文化祭事業は加美町全体で取り組む事業の一いつとして開催に

向けて検討し始め、平成17年3月に「第1回 加美町食の文化祭」を実施するじとなりました。

しかしながら、加美町全体での事業として展開するには大きな弊害がありました。第一

と成長していったのです。地元のありのままの食生活の魅力を再発見し、誇りを持てぬよになつた住民が工夫を重ね、毎回趣向を変えたイベントとして企画することじで、地域のリピーター創出に繋がり、そのことが高く評価され、全国過疎地域自立促進連盟会長賞を受賞するじができました。

この地域にも先祖から受け継がれておりのか分からなかつたじこと、第二に各種団体の世代交代が合併とともに進み、今まで各団体で舵を取つていた人がいなくなつたこと、第三に旧中新田町、旧小野田町の住民も、旧宮崎町で最初に見られた抵抗、遠慮が大きかつたじことが挙げられます。そのため、第1回加美町食の文化祭では、100品程度の展示に留まりましたが、

加美町りしさを出すために用意した地元の合鴨やキノコ、山菜をふんだんに使つた加美町パエリアの試食は大変な好評だったほか、食の文化祭を通じて交流できた大分県中津江村をはじめとなる中で、食の文化祭を続けてほしい、との声が上がり、結果的には町の商工観光課が担当するじとに。以降、食の文化祭では、スローフード・スローライフは人間のスタイルに合わせたものだけではなく、野菜や川魚など自然の流れに逆らわず、そこにある食材と向かい合い、作物たちの都合と寄り添いながら生きるじるじじつじを再確認させてくれます。「旧宮崎町で掘り起された食の文化を加美町全域で継承し、地域の子どもたちに伝えていく」じじのことは、学校では教えてくれない、食の地元学と言えるじょひ。

この地域にも先祖から受け継がれておりのか分からなかつたじこと、第二に各種団体の世代交代が合併とともに進み、今まで各団体で舵を取つていた人がいなくなつたこと、第三に旧中新田町、旧小野田町の住民も、旧宮崎町で最初に見られた抵抗、遠慮が大きかつたじことが挙げられます。そのため、第1回加美町食の文化祭では、100品程度の展示に留まりましたが、

ております。

### 受け継がれる食文化への誇り

コンビニや大型店舗にじけば何でも揃い、食の企業から食卓の侵略支配を受けつつあるじじそが、自分の子に孫に、食の安全安心を受け継じてもらいたため、家庭の食卓や地域の食文化、食の地元学を掘り起す絶好の機会と思われます。

# 豊かな自然、大地の恵み、心のふれ合う協働のまち

—長寿の種、福禄の種、楽の種を語源とする三種川のように—

三種町は、平成18年3月に3町（琴丘町、山本町、八竜町）が合併して誕生しました。西は日本海に面し、秋田県の北西部、男鹿半島の北に位置している人口20,115人の農業が基幹産業の町です。

特産品は、生産量日本一の森岳じゅんさいのほか、八竜メロン、梅、岩川水系米などがあり、観光資源には、しおりぱい温泉の森岳温泉や36ホールの秋田森岳温泉36ゴルフ場、砂の彫刻展サンドクラフトをはじめ、昔、修験者の道場地として栄えた信仰の山、房住山があります。また、じゅんさい摘みとりなどの農業体験、夏には、旬の森岳じゅんさい鍋、冬が旬のだまご鍋などの田舎料理もあり、三種町はこれらの地域資源を活用し地域づくり活動を行っています。

サンドクラフトの目的は、地域資源を活用した交流人口の拡大と特產品

## 砂の彫刻展 「サンドクラフト」

砂の彫刻展「サンドクラフト」は平成9年に開催して平成22年で14年目になります。きっかけは、平成8年に

旧八竜町で開催された日本砂丘学会に参加した鹿児島県南さつま市（旧加世田市）職員の1枚の名刺からでした。名刺にあつた砂の彫刻写真を見た、当時の佐藤亮一町長が、「釜谷浜海水浴場でも砂像ができるのか」と聞いたのが始まりです。地元釜谷浜海水浴場でも砂像づくりが可能と分かり、役場職員や町民を派遣させ、第1回サンドクラフトは、南さつま市から砂像を制作できる砂像連盟会員を招聘して開催しました。



秋田県 三種町 みたねちょう

▲2010サンドクラフトメイン会場

や町のPRによる活性化を図ることで

す。当初は電源交付金を活用し、2,000万円を超える予算で実施しましたが、今年は事業費1,000万円で実施することができました。入り込み客数は野外イベントのため天候に左右されますが、今年は時折雨の降るあいにくの天気にもかかわらず、開催2日間で約34,000人の人出がありました。また近年は、他県からの観光客が増え、イベントの知名度は広く着実に伸びてきていて、町の貴重な観光資源となっています。

このサンデクラフトを利用してイベントには、東京みたね会余員等を対象にした、「ふるさと体験モニターチャーなどがあります。平成22年で4回となりますが、毎年20名前後が参加し、町の魅力紹介や各種体験などが参加者に好評を得ています。

サンドクラフトの課題は、砂像作り後継者不足と資金確保とマンネリ化です。砂像づくり後継者不足対策については、昨年から県の元気なふるさと秋田づくり活動支援事業補助金を導入し、「砂像づくり出前講座」を実施しています。今回は町内各地で出前講座による砂像制作と展示を実施し、後継者育成とサンドクラフトのPRを実施することができます。平成23年は今年以上に町内各地で砂像づくり出前講座を実施し、将来は町内各地で砂像が作られる日本一の砂像の町になることを目指してます。

資金確保とマンネリ化対策については、平成15年に民間の力と智库による運営を目指し、それまでの町主体イベント協議会と民間主体実行委員会が統合しました。それ以来はサンデクラフトが終了した

▲砂像づくり体験を楽しむ親子

▲砂像をバックに水着コンテスト



その年の秋頃から、企画会議を開催し、早い時期から企業広告協賛金集め等の準備活動を始めるようになり、全体予算に占める自己資金（広告協賛金と環境協力金と出店料）の割合が高くなりましたが。また、効果的でない企画の廃止や新しい企画の取り入れなどを積極的にを行う方式により、一時後退していた特産品のPRや販売活動強化、伝統芸能の取り入れが、観光協会やNPO法人、農協、商工会、バレーボール連盟、綱引連盟などで実施されています。



▶彫刻家保坂俊彦氏制作  
メイン砂像(高さ5メートル)

「ドクターフィートを活かした地域づくりを進める計画」です。

## 田んぼの中から突然湧き出した じょっぱい温泉

▲じょっぱい温泉 森岳温泉郷

森岳温泉は、昭和27年に石油採掘中に田んぼの中から突然湧出し、長く秋田の奥座敷として親しまれてきました。無色透明で、弱アルカリ性の「とてもじょっぱい温泉」として有名で、泉質も優れ皮膚病などに効く効用があります。

塩分濃度は、海水（塩分濃度約3%～3.5%）には及びませんが、約2%の塩分濃度があります。料理への利用など色々な活用アイデアはありますたが、実現には至りませんでした。しかし温泉については、温泉付分譲地や温泉付別荘、病院、介護施設などに利用されています。

森岳温泉が全盛期の頃には、数多くの温泉ホテルや旅館、飲食店、みやげ店などで賑わっていましたが、現在は3軒のホテルと町営温泉1軒だけになり、飲食店も少なくなっています。宿泊観光客数も年々減少し、21年は149,000人（内町営温泉133人、596人）となりました。



森岳温泉郷の振興のために開催されているイベント、花火と日本一の森岳じゅんさじを取り入れた「森岳温泉夏まつり」は、「森岳温泉まつり」と同じく、「じゅんさじ王国ゆの湯フェスタ」を平成10年に一本化したイベントで、平成22年で13回目の開催となりました。

三種町観光協会では森岳温泉郷を核とした三種町観光振興のため、平成22年度は秋田県緊急雇用創出臨時対策基金事業を導入し、2名の失業者を雇用了した「森岳温泉郷活性化支援事業」を実施し、森岳温泉郷に観光案内所を設置したり、観光イベントの企画や、当地グルメの普及、温泉郷全体の営

利用者数となつてます。また森岳温泉郷のホテルと連携した韓国人「ゴルフツアーや誘致も行われています。そのほかには、遊歩道やバンガロー等が整備され、四季折々の自然観察などの野外活動のできる石倉山公園。岩手競馬の場外勝馬投票券販売所として開設され、140インチの大画面で迫力あるレースシーンを見ながら、手軽に競馬を楽しむことができる「レトロラック山本」。農家や町民有志で組織した農業体験受け入れ組織で、人気のじゅんさじ摘みどりや、そば打ち、干し餅作り、郷土料理作りなどが体験できるやまもと百姓大学。三種川の源流にある信仰の山、房住山（409メートル）には、バンガローや登山道が整備されており、今年は房住山を主体とした観光ガイド協議会が結成され、町内各地をガイドできる人材を育成する計画です。



▲森岳温泉夏まつり  
わんこじゅんさい競争

利用者数となつてます。また森岳温泉郷のホテルと連携した韓国人「ゴルフツアーや誘致も行われています。そのほかには、遊歩道やバンガロー等が整備され、四季折々の自然観察などの野外活動のできる石倉山公園。岩手競馬の場外勝馬投票券販売所として開設され、140インチの大画面で迫力あるレースシーンを見ながら、手軽に競馬を楽しむことができる「レトロラック山本」。農家や町民有志で組織した農業体験受け入れ組織で、人気のじゅんさじ摘みどりや、そば打ち、干し餅作り、郷土料理作りなどが体験できるやまもと百姓大学。三種川の源流にある信仰の山、房住山（409メートル）には、バンガローや登山道が整備されており、今年は房住山を主体とした観光ガイド協議会が結成され、町内各地をガイドできる人材を育成する計画です。

業活動、首都圏等へのPR活動など、じょっぱい温泉や町内外観光資源の活用による観光客の拡大と、地域資源森林温泉郷の活性化を進めています。

## 日本一の生産量 ～森岳じゅんさじ～

じゅんさじの歴史は案外古く、万葉集に、ぬなわ（忍縄）として詠われている多年草の水生植物です。昔は日本全国の自然の沼で繁殖する植物であったのですが、水稻の転作として旧山本町地域で栽培が広まり20年間以

ている多年草の水生植物です。昔は日本全国の自然の沼で繁殖する植物であったのですが、水稻の転作として旧山本町地域で栽培が広まり20年間以

上も「じゅんさいの生産量日本一」を誇っています。しかし、価格の低下や生産者の高齢化などにより、生産量は平成3年の1、260トンをピークに平成21年は最盛期の1／3の400トンまで減少してしまった。

三種町商工会では、森岳じゅんさいによる地域振興を図るために、町内の農協を含むじゅんさい加工業者の社による「森岳じゅんさい加工業者組合」を組織し、平成21年度から秋田県緊急雇用創出臨時対策基金事業による「森岳じゅんさい沼へ廻るため27名を雇用しました。



また、三種町商工会では平成22年、地域資源じゅんさいによるおりついの基本となるビジョン作りのため、商工会連合会と秋田県ふるさと雇用再生臨時交付金事業と町の補助金を利用して、森岳じゅんさいビジョン策定事業を開始しました。町職員のほか、生産者、加工業者、市場関係者、大学教授の20人を受託しています。雇用期間は6ヶ月間で、摘み取り担い手15名と事務員1名を雇用し、加工業者組合8業者に分かれ、約1週間のローテーションでベテラン摘み取り手からじゅんさい摘み取り技術を習得しました。始めは1日約2～3キロしか取れなかつた雇用者も、雇用期間後半には約10キロ近く取れるようになります。摘みとり担い手育成事業終了後は、派遣制度を作る計画で検討しています。また自立を目



▲じゅんさい摘み取り体験モニターツアー  
受講してから、受講生の中には平成22年じゅんさい沼を購入し、独立を目指す人も誕生しました。2年目は加工業者組合加盟全9社が、摘み取り担い手を受け入れする」とになり、3人1組でじゅんさい沼へ廻るため27名を雇用しました。



▲じゅんさい沼観察風景

22年じゅんさい沼を購入し、独立を目指す人も誕生しました。2年目は加工業者組合加盟全9社が、摘み取り担い手を受け入れする」とになり、3人1組でじゅんさい沼へ廻るため27名を雇用しました。

また、三種町商工会では平成22年、地域資源じゅんさいによるおりついの基本となるビジョン作りのため、商工会連合会と秋田県ふるさと雇用再生臨時交付金事業と町の補助金を利用して、森岳じゅんさいビジョン策定事業を開始しました。町職員のほか、生産者、加工業者、市場関係者、大学教授の20人を受託しています。雇用期間は6ヶ月間で、摘み取り担い手15名と事務員1名を雇用し、加工業者組合8業者に分かれ、約1週間のローテーションでベテラン摘み取り手からじゅんさい摘み取り技術を習得しました。始めは1日約2～3キロしか取れなかつた雇用者も、雇用期間後半には約10キロ近く取れるようになります。摘みとり担い手育成事業終了後は、派遣制度を作る計画で検討しています。また自立を目

名で作った森岳じゅんさい産業育成戦略会議と作業部会により策定します。

作業部会はさらに「生産」と「加工」と「里づくり」の3つのテーマに分かれ、ワーキンググループ方式により作業を進めています。平成22年の夏には、

ビジョンを作る期間の有効活用とPR効果を狙って、里づくりワーキンググループ主催で、町内小学生5・6年生による自然学習会を実施しました。参加した26人の児童は、水生生物や植物などの調査や学習をし、その成果を町民祭で発表する計画を立てています。

森岳じゅんさいを取り巻く環境は、

国内の新たな産地の誕生や、安価な中國産の流通増加などにより年々厳しくなっています。そのため、商工会主催で取り組んでいる、「森岳じゅんさい摘み取り担い手育成事業」と「森岳じゅんさい産業育成ビジョン策定事業」は、喫緊に必要な事業となっています。じゅんさい産地として生き延びるために、品質と認証の確保などを進め、じゅんさい産業関係者の手取り収入を向上させ、日本一の森岳じゅんさいによる地域づくりを進めてゆきたいと思っています。

三種町企画振興課課長補佐 伊藤祐光

自然にやさしく、人健やかにしてやすらぎ、産業が息づき、明るく文化の香り高い風土の形成と人々が交流する「ふるさと五城目町」をめざして

# 思いやりと活力に満ちたふるさとの創生

## 町の状況

五城目町は、秋田県の中央部、八郎潟の東部に位置し、町土の面積214・94平方キロ、人口10,978人（平成23年2月末住民基本台帳）の行政規模となっていきます。

急峻な山岳地帯から肥沃な水田地帯まで変化に富んだ農業と林業の農山村であるとともに、中心部には500年の伝統を誇る露天朝市が栄え、製材、家具、建具、打刃物、醸造業と商店街が発達し、湖東部における商工都市を形成しています。

気候は、年平均気温11・2℃、年降水量1,790mm、最深積雪値40cm（平成21年秋田地方気象台）で、春夏秋冬の季節感がはっきり体感できる地域であります。

現在の五城目町は、昭和30年に旧



秋田県 五城目町 ごじょうめまち

五城目町、馬場目村、富津内村、内川村、大川村が合併、さりに昭和33年に面潟村の一部が編入して誕生しました。その後、いわゆる平成の大合併においては自立による行政運営を余儀なくされ、単独立町として現在に至っています。

## 協働のまちづくり

これから地域の課題解決や暮らしやすいまちづくりを進めていくためには、町民と行政が、一緒に考えて一緒に汗を流して、互に協力し合いつき目的を持って取り組む必要があります。五城目町では、地域の課題解決やまちづくりを、町民が主体的に考えて、実践し、これを行政が支援していくといつたパートナーシップを重視した「協働」の関係を築き、新しいまちづくりを進めています。

平成20年6月には、誰でも健康増進や憩いの場として自由に使用できる芝生広場を整備しようと、芝張り作業を実施しました。作業には2日間で約

350人のボランティアが集まり、約4千m<sup>2</sup>の土地へ、4万枚の芝の苗を植え付けました。

町では、このように町民が自主的、

主体的に行う、地域環境の美化、清掃、ごみ対策など、身近な環境をきれいにする活動や地域を元気にする多彩なイベント開催などの“まちづくり活動”を支援しています。

正月の初売りに始まり、福寿草の苗やフキノトウが春の息吹を伝えると、新緑と共にワラビ、ゼンマイなど多彩な山菜が並び、5月には祭市。そこ

には色鮮やかな野菜が加わり始めて、8月は盆市。夏が過ぎて、栗やキノコが顔を出し、大根や白菜など漬物の素材が増えるにつれて冬へ。そして、正月用品の買出しで大変なにぎわいとなる歳の市。そのほか、イベントとして、5月春まつり、6月市神祭、10月秋まつり、2月冬まつりを開催しています。

江戸時代は、久保田と能代や檜山の中間、そして阿仁鉱山への物資補給の基地として栄え、さまざまな職人が集まり、農作業や生活に必要なものがすべてそろっていました。

豊富な自然の恵みから、包丁や桶、ザル、衣類などの生活用品まで。暮らしに密着した市の伝統そのままに、五

城目「市」は、戦後八斎市から2.5.

7.0の付近で行われる十一斎市になりました。時代が変わつても市は、

人々との生活と密着していたことから、今日も繁栄続けています。

正月の初売りに始まり、

福寿草の苗やフキノトウが春の息吹を伝えると、新緑と共にワラビ、ゼンマイなど多彩な山菜が並び、5月には祭市。そこには色鮮やかな野菜が加わり始めて、8月は盆市。夏が過ぎて、栗やキノコが顔を出し、大根や白菜など漬物の素材が増えるにつれて冬へ。そして、正月用品の買出しで大変なにぎわいとなる歳の市。そのほか、イベントとして、5月春まつり、6月市神祭、10月秋まつり、2月冬まつりを開催しています。

江戸時代は、久保田と能代や檜山の中間、そして阿仁鉱山への物資補給の基地として栄え、さまざまな職人が集まり、農作業や生活に必要なものがすべてそろつていました。

朝市は、春夏秋冬の旬の彩をあざやかに放ち、訪れる人々の心を和ませます。

市ふれあい館」が完成します。

この朝市ふれあい館は、歴史的地を次代に継承するとともに、交流の場として文化及び産業の振興を図り、中核市街地の活性化に寄与するため、「朝



と「にわわこ」ネットワークの形成による街なかへの誘客、更には少子高齢化に対応した「ミニコニティづくり」による地域交流の活性化に大いに期待しているところです。



だまこ鍋  
鶏ダシ仕立てのスープに、ご飯をすりつぶして丸めた「だまこもち」とキノコや野菜を加えた鍋。古くから五城目町の家庭料理として食されてきた、町を代表する郷土料理です。

防災など、年々その輪を広げ、交流が盛んになってきています。

首都圏に住む五城目町出身者で結成された「ふるさと五城目会」は、会員相互の親睦を図りながら、千代田区

や五城目町の行事に参加したり、会報を発行したりと積極的な活動を続け、姉妹都市提携の架け橋的存在になっています。

昭和60年来から交流友好関係を深めてきた千代田区と五城目町は、平成元年10月姉妹都市提携を結び、以来行政の交流はもちろん、子孫もから大人のスポーツ交流、町内会・福祉・消防

千代田区と姉妹都市の縁を結ぶことにより、互いの個性的な特性を活かしながら住民同士が親しく交流し、また非常時や緊急時には協力し、助け合ひながら、相互の発展に努めています。

平成21年10月には五城目町・千代田区姉妹提携20周年記念式典が行われ、これまでの20年の歩みを振り返るとともに、今後、両自治体が益々発展し、より一層友好が深まる」と誓ひ合いました。

また、千代田区と五城目町の姉妹提携20周年を記念して始まった「五城目町・千代田区児童双向交流事業」の交流体験が平成23年1月に五城目町で開催され、児童19人が、雪遊び、郷土食べづくり、布ぞうりづくりなど、田舎なりでの体験を行い、各家庭にホームステイするなど、五城目町での生活をより身近に体験するところへ、お互

こに交流を深めることができました。

## 新たな町特産物 「キイチ」「の誕生

キイチ「類は、欧米ではラズベリー、ブランクベリーなどの名前で、知られています。主要な果実のひとつです。日本のキイチ「の輸入量はここ10年間で10倍以上に増加し、キイチ「類への需要は高くなっています。しかし、日本には主要産地がありません。五城目町では「五城目町農業活性化促進会議」における「平成19年度五城目町農業活性化に対する提言」の中で、キイチ「を特産品として推進することを決定しました。

その要望に答えるべく、五城目町では「他県に先駆けて供給体制をつくり上げた」「秋田県独自の特性を持つたキイチ「品種を生産したい」という声があがりあした。そして、平成20年に秋田県立大学との産学共同研究で「五城目町キイチ「研究会」を立ち上げました。

秋田県では、過疎化や高齢化等の進行により、集落活動の停滞など、活力の低下する集落が増加傾向にあるところ、高齢化等集落の自立と活性化を促すため、市町村との協働による高齢化等集落対策に取り組んでいます。その取り組みの中で、小規模高齢化集落を対象にした「元気な暮らづくりプロジェクト支援」として、県内20市町

の和菓子職人による「キイチ」「最中」、県内の酒造会社による「キイチ」「を使ったリキュール酒」や県内飲食関係者によるキイチ「カクテル、キイチ」「生ジュースが発売されています。特に

キイチ「生ジュースは、県内のイベントから声が掛かりた皆さんの方々に味わって頂いています。また、洋菓子業界からも引き合ひが多く、ケーキやパフェなどに生果実・冷凍果実が利用されています。加えて平成23年3月に、日本内外からの関心も高く、その期待に応えるべく会員も生産に力を入れており、今後さらなる活動が期待されています。

## 小規模高齢化集落における まちづくり

村52集落の住民の生活等に関する「明るさ・希望調査」が行われました。

本町では、3地区7集落が対象となっています。集落の活性化に向け、一人一役による住民全員参加型の集落づくりや住民が主体となつた実践活動への展開を目指し、県元気ムラ推進チームと連携して、地区毎にワーキングショップを開催するとともに、住民主体による話し合いの開催や地域住民から研修会などに参加していただいている

ます。また、高齢者地域における買い物支援と交通手段確保のため、課題の抽出と解決策の検討も進めており、無料貸し切りバス運行による郊外型大型店舗での買い物支援などが行われています。

ており、安定した交通運行が確保されるとともに、買い物などの日常生活における不安を取り除き、高齢者が生き生きと安心して暮らせることが期待されています。

## 映画「釣りキチ三平」のロケ地が新たな観光資源



▲「釣りキチ三平」のロケ地にもなった巨岩[ネコバリ岩]（左）  
「三平の家」には、観光案内人を配置し、一般公開を行っておりますが、入館者は、毎日30人から50人の観光客で賑わいを見せおり、これまでの当地域への登山、渓流釣りなどの観光入込客数（年間約7,500人）に匹敵す

映画「釣りキチ三平」のロケ地は、平成21年3月の映画公開によって、この町の豊かな自然や文化などを広く全国に発信することができ、築100年の茅葺民家「三平の家」、馬場田川源流部にある巨岩「ネコバリ岩」は、訪れる多くの人々に感動を与えており、新たな魅力ある観光資源になりつつあります。



「三平の家」には、観光案内人を配置し、一般公開を行っておりますが、入館者は、毎日30人から50人の観光客で賑わいを見せおり、これまでの当地域への登山、渓流釣りなどの観光入込客数（年間約7,500人）に匹敵す

盆城庵（ぼんじょうあん）  
古民家を復元して建てられた茅葺き屋根の宿泊施設。暖炉裏で山村生活を体験。1日1組限定の自炊の宿。

盆城庵（ぼんじょうあん）  
古民家を復元して建てられた茅葺き屋根の宿泊施設。暖炉裏で山村生活を体験。1日1組限定の自炊の宿。

## 最後に

信拠点の設置を目的として整備した農家レストランは、平成23年4月にオープンしています。開業時から各種報道機関による取材や報道がなされ、1日の食事の提供数は当初見込みの倍以上となっており、旬の山菜を中心としたメニューを提供していますが、お客様からはヘルシーで大変おいしく高い評価をいただけており、リピーターも多く、大変喜ばしく思っています。

私たちを取り巻く環境は、大変厳しいものがありますが、五城田町では、小規模高齢化集落における集落機能の強化、朝市を核とした中心市街地活性化事業による更なる地域経済の活性化、町民生活に密着した福祉の充実や生活基盤の整備、産業・教育の振興など、各種事業を展開し、地域の資源を活かしながら「豊かで暮らしやすい地域の形成」に向けて、当面する課題に積極的に取り組み、安心・安全に暮らせるまちづくりを進めたいと思います。

五城田町まちづくり課

澤田石清樹

（平成23年4月11日付第275号）



# 「温もりと活力ある まちづくり」

—情報と人・もの・自然・文化に出会う会津嶺の里—

## はじめに

磐梯町は福島県会津地方北東部に位置し、秀峰「磐梯山」をはじめとする豊かで美しい自然環境に包まれるとともに、平安時代初期に徳一菩薩が慧日寺を創建し、会津仏教文化発祥の地として栄えるなど、悠久の歴史と文化、伝統を有する町であります。

町土は、総面積が59・69km<sup>2</sup>で、うち約70%が磐梯朝日国立公園を含む山林で占められ、起伏の多い山岳地となつており、この地形を活用して、スキー場やゴルフ場が立地しております。気候としては、日本海型気候の地域に属し、年間平均気温は10℃前後で夏期は比較的しのぎ易い一方、冬期は平均150cmもの積雪があり特別豪雪地帯となっています。

また、人口は3,849人、世帯が1,483

台帳)で、高齢者率が29・7%となつております。過疎地域指定の町であります。

現在の磐梯町は明治22年の市町村制施行の際、4ヶ村が合併し磐梯村となり、昭和35年4月に町制を施行し、その後平成の大合併において町民の多くの声をもとに、自立とじう道を選択し、今日に至っております。

## 幼小中一貫教育

「まちづくりは人づくり、人づくりは即ち教育である」との理念に基づき、

基礎学力の向上や豊かな人間性の涵養、体力の向上を目指して、平成16年度から町独自の幼小中一貫教育を導入しています。

英語、算数・数学を中心とした教育を行うとともに、幼児教育の重要性



福島県 磐梯町 ばんだいまち

▲磐梯町の航空写真

性を考慮して子育て中の若者世代の負担を軽減するために幼稚園保育料の無料化を実施しています。

更には、昭和63年のカナダ国オリバー市との姉妹都市締結を契機として、

平成元年度から相互間の教育交流をス

タートし、ホームステイなどを通じた

相互親善交流、語学指導外国青年招致事業や町独自の語学指導助手の招致など、語学教育の環境充実に努め、国際理解とともに国際人としての自覚を得する教育を実践しています。

また、一ト化社会に適応できる個性と創造性豊かな人材を育成するため、平成15年から整備を開始した光ファイバー網を活用し、積極的な情報教育に

も取り組んでいます。

今後の取り組みとしては、平成24年度より中学校の校舎、体育館などの建替え整備に着手し、さらなる教育環境の充実を図る計画があります。

## 悠久の歴史と文化のまち

史跡慧日寺跡は、今からおよそ

千二百年前、理想の仏法を追い求めて南都（奈良）を離れ、靈峰磐梯山の麓にたどり着いた一人の若い僧「徳二」によって開基された東国を代表する寺院です。その広大な寺院跡は昭和45年に国の史跡に指定され、以来、町をあげてその保存に努めてまいりました。

その経過の中で、町は史跡慧日寺跡の整備事業を「特色あるまちづくり」の重点施策に位置付け、約17万平方メートルにも及ぶ広大な指定地のなかで、20年以上にもわたり発掘調査を行ってまいりました。



▲幼小中一貫教育（幼稚園での授業風景）

心伽藍部の整備計画を文化庁はじめ有識者からのご指導をいただき進め

こりましたなか、



▲(上)巫女舞 (下)復元された金堂と中門

も取り組んでいます。この他にも磐梯町には、福島県指定重要無形文化財としての「磐梯神社の舟引き祭りと巫女舞」、町指定無形文化財「会津赤枝彼岸獅子舞」など、多くの行事・文化が伝承されております。

## 観光のまちへ

本町は、磐梯朝日国立公園内の磐梯山や廻嶽山・猫魔ヶ岳等を北限として、南限は猪苗代湖を水源とする一級河川日橋川が流れ、磐梯西山麓湧水群は日本名水百選にも選ばれ、豊かな自然と環境をもつた山紫水明の町です。

夏期には多くの登山客でにぎわい、大自然を満喫しております。

また、総合保養地域整備法（リゾート法）の第1号として承認され、行政主導型による整備がなされた、スキー場・ゴルフ場・日帰り温泉施設を備えるオールシーズン型の「アルツ磐梯リゾート」やオーナーの個性が光るバリエーションに富んだ「七ツ森ベンション」、「テニスコートやゲートボール場、アスレチック広場など家族連れで楽しめる「おおるり公園」など、四季を通して訪れる人々に憩いの場を提供しています。



▲道の駅オープン



▲磐梯山頂上からの展望

むりに、平成21年にオープンした「道の駅よんだい～徳一の里きりり～」は新鮮野菜や手芸品おみやげなどの地場産品はむかろとのこと、青森県むつ市との交流により山でありながら海の物が楽しめるとあって好評を得ています。町の名産であるそばの実を使った「そばソフト」もおすすめです。

当町において、ライフスタイルの変化、核家族化の進行に伴い、高齢者世帯や一人暮らし高齢者世帯、要介護世帯も増加傾向にあることから、町民の福祉の充実、向上を図るため、社会福祉協議会の活動の活性化とともに老人福祉センター及び保健医療センター整備を行つて来ております。

さうに、平成12年4月にオープンした診療所を核とした保健医療福祉の複合施設「磐梯町保健医療福祉センター（瑠璃の里）」の活用によるデイサービスセンター、現在の居宅介護支援事業所等の強化を図り、リハビリや健康づくりに向けて安心して生活できる「長寿・福祉社会」の実現に向けて幅広い事業活動の展開を図つています。



▲磐梯町保健医療センター「瑠璃の里」

平成15年11月には介護保険制度のもと医療と介護、自立支援を兼ね備えた磐梯町介護老人保健施設「ひらじい」を開設し、医療を受ける本人はもどり、介護している家族の負担軽減を図つています。

また、一人暮らし高齢者などの安全な生活確保のため、緊急電話の導入を図るとともに、保健師やホームヘルパーによる訪問、指導活動を含めた一人暮らし、寝たきり高齢者対策等の推進並びに、身体障害者福祉対策にも力を

平成16年度に磐梯町地域情報基本計画を策定し、全町に光ファイバー網を整備しました。この整備により、ブローダバンドの普及率も高まり子どもから高齢者までインターネットを楽しみ、ーーーが生活の一部になつております。

平成22年度からは、今までの防災無線に代えて光ファイバー網を活用した防災行政情報システム（ＴＶ電話）の整備を行つております。「音声」だけではなく、「文字」、「画像」による情報発信は、住民生活利便性の一役を担つております。

これからも、ーーーの技術は進歩し、ますます便利な情報化社会になることが予測されますが、住民ニーズを的確に捉えながら、時代の波に取り残されなじよつ情報化を進めてまいります。

## 魅力あるまちづくり ーーーを活かした

情報化社会と呼ばれ、住民の価値観やニーズが多様化する中、本町では地域間による情報格差をなくすため、

知サービスでは高齢者の安否確認も可能となるなど、安心、安全なまわりへひらじいに取り組んでいます。

懲される中、歯止めをかけるとともに、ある地区においては小学校の複式学級が解消されるなどの成果が着実に現れております。

また、七ツ森地区に若者定住促進住宅地分譲事業（一区画120万円）や民間活力による住宅整備の推進など、今後ますます子育てに良好な住環境の確保に努めてまいります。



▲ITを使った合同児童学習会



町は、少子高齢化や人口減少に歯止めをかけるため、特に若者の定住化に向けた住宅施策に取り組んでおります。具体的には、平成17年度から子育て世帯を対象とした若者定住住宅の整備を行っており、同年度には4棟12戸の整備を行い、夫婦12組、12歳以下の子供21名、計45名が入居し、少子化対策に一定の成果を上げることができました。

以来、平成23年度までに31戸の若者等定住住宅整備を行い、夫婦31組、子供55名が入居し、さらには平成24年度にも6戸の若者等定住住宅の整備を計画しており、県内で人口の流出が危

町の産業別就業構成は第1次産業18・2%、第2次産業28・6%、第3

## まちの産業

地元企業としては、日曹金属化学株会津工場やレンズ製造業である㈱シグマ会津工場、名水を活かした榮川酒造㈱磐梯工場や㈱佐川磐梯山製氷工場などが立地しています。既存企業の発展はもとより、さらなる魅力ある雇用の場の確保、若者が就業

できる中、担い手である專業農家の持続的発展を促すため、経営的に効率・安定化を図れる生産構造の改善と「米」を中心とした販売ルートの新たな開拓など、経営基盤の充実強化を目指した、「ミニマックスセンター構想」に取り組んでこられたところです。

今後、この状況からじわじわ脱却できるかが、最優先課題となっており、これまで安全・安心を確認するため米をはじめとする農産物のモニタリング調査や観光誘客事業やPRなどに努めて来たところであります。

## おわりに

するために、本町の資源特性や環境を生かした企業の誘致に向けて、現在取り組んでいるところであります。

平成23年3月11日発生の東日本大震災による被害は、幸いにして大事に至らなかつたものの、原発事故による風評被害は、震災の被害を受けていた当町においても、農産物や観光をはじめとする、あらゆる業界に大きく影響を及ぼし、地域経済全体の停滞を招いております。

磐梯町長 五十嵐源市  
(平成24年3月19日付第2793号)

▶シグマ工場

▶磐梯山とソバ畑